

## 平成 24 年産米の放射性物質濃度の低減に向けた耕種的な対策について

### 1. 耕起について

○耕深 15～20 cm を目標に耕起する。

- ・放射性セシウムが表層近くに集積していると玄米への移行リスクが高まる。
- ・作土の深さは、10～12 cm 程度のほ場が多い。
- ・深く耕起することにより、放射性セシウム濃度を作土全体で下げることが期待できる。

### 2. 代かきについて

○代かきは浅水で行い、濁り水を強制落水しないようにする。

- ・ほ場外への肥料成分の流失と放射性セシウムの拡散を抑えるため、浅水で代かきする。
- ・代かき時に水が多いと、放射性セシウムを吸着している粘土がゆっくり沈降し、表層に集積する危険性がある。

### 3. カリの施肥について

#### 1) 玄米の放射性セシウム低減のためのカリ施用について

- カリ含量の低い水田では、土壤の交換性カリ含量を 15mg～25mg/100g 乾土程度となるよう増やす。
- カリ肥料は、流亡しやすいので施用後は直ちに耕起する。
- 各市町村等でカリの施用について別に定めている場合は、その取り扱いによるものとする。
- カリ肥料の施用により放射性セシウムの吸収が完全に抑制されるわけではない。耕起・代かき・水管理対策と組み合わせて実施し、吸収抑制の効果を高める必要がある。

- ・土壤中のカリ濃度が極端に低い(10 mg/100g 乾土以下)ほ場では、玄米中に放射性セシウムが検出される傾向にある。
- ・稲わらを全量持ち出しし、土づくり肥料等の施用も行われていないほ場では、土壤中のカリウム濃度が低下している懸念がある。

#### 2) 基肥について

- 標準的な基肥のカリ成分量は 8～10 kg/10a である。カリ成分が不足する場合は、塩化カリ・ケイ酸カリ等を追加施用する。
- 復元田においては、無窒素施用が適する場合でも P K 化成等でカリ成分を施用する。

- ・収穫時の水稲は、肥料・土壌・灌漑水からカリ成分を 15~20kg/10a 吸収している。
- ・環境保全米栽培では、有機質肥料に含まれているカリ含量が少ないため、肥料による施用量（平均カリ成分量 3.3 kg/10a）とたい肥量全体でカリ施用量を検討する必要がある。

### 3) 追肥について

- 幼穂形成期、減数分裂期に追肥する場合、窒素成分だけでなく、カリ成分も併せて追肥する。
- カリ肥料のみを単肥で追肥する場合は、出穂前 45 日・幼穂形成期・減数分裂期頃が施用時期になる。

- ・水稲は、穂ばらみ期から出穂期にかけてカリウムの吸収量が多い。
- ・葉色が濃く、窒素成分の追肥ができない場合でも、カリ成分のみの追肥を検討する。

## 4. 農業用水について

### 1) 農業用水の取水管理について

- 河川取水等の農業用水は、大雨時などの濁り水や泥土の流入を避けるよう努める。
- ため池からの取水は、できるだけ表面取水となるよう努める。

- ・環境省による公共用水域の放射性物質モニタリング測定において、河川の水質は不検出であるが、河川の底質からは一定の放射性セシウムが検出されている地点がある。

### 2) ほ場の水管理について

- 根腐れを防止する水管理を行う。また、排水不良のほ場では、溝切り等を行い、排水条件を整える。
- 出穂後の落水時期は、出穂後 25 日以降(刈り取りの 2 週間前を目安) とする。

- ・作土中の放射性セシウム濃度が表層近くで高く、さらに、稲株が容易に引き抜けるなど、根張りが浅いほ場で生産された玄米からは放射性セシウムが検出されている。
- ・排水不良ほ場では、根腐れを起こし根張りが浅くなるので、根の健全化を図る必要がある。

## 5. 用排水路の江払い作業について

- 用排水路の江払いは、水路敷地内での処理とし、田面に入れないように注意する。  
また、江払いで撤去する土砂は、地域外への搬出を控える。
- ただし、用排水路の江払い作業等について、各市町村等の取り扱いが別に定めている場合は、その取り扱いによるものとする。